

## 庚申信仰の歴史

—豊後大野郡地方を中心とした—

芦 刈 政 治

### 一、一序

私共の郷土に「庚申さま」と呼ばれる信仰のある事は周知の事であらうと思う。

今日、此の庚申信仰は吾が国固有の信仰であると云う柳田国男先生の説と中国古来の三戸信仰の変容ではなからうかと云う窪東大助教授の説がある。

窪先生は最近東方学論集才三輯の中で中国の三戸信仰と吾が国の庚申信仰との類似点を挙げられ此の二つの信仰が非常に深い関連性を持つていと述べられている。そして吾が国の庚申信仰の実例として福井県美浜町に於ける庚申信仰の型を挙げられている。

私は江戸時代に急速に伝播されて来た庚申信仰が大野郡にどのような受け継がれ信仰されたかと云う事を述べて見たいと思う。

### 一、庚申信仰の概要

それでは庚申信仰とはどのような内容をもつ信仰であらう

か。通説に従つて極く簡単に述べて見よう。和漢三才図繪によると庚申の項に次のように書いてある。

「彭三屍之姓也 常在三人身中」 伺三察其所爲罪一 無三庚申日一 告上帝一 故此夜不寝子而守三屍二」とし更に「毎三庚申一 向寝而呼三其名三戸永去萬福自来」

これを今少し具体的に説明すると、人間の体の中には上戸・中戸・下戸という三戸の虫がいて上戸彭蠡・中戸彭瓊・下戸彭璣とそれぞれ名称があり、居所や色や衣服の色まで決つてゐる。

上戸は人間の頭の部分に住んで居り、頭を重くさせ・眼を暗くさせ・耳を遠くさせ・齒を抜き顔のしわをよせ・髪を白くさせる等種々の機能を持つてゐる。

中戸は内臓に住んで居り、このために心が迷つたり・物忘れをしたり・五臓六腑を損ない・痰が多くなつたりするのである。

又、下戸は足に住居を持つて居り、このために女色を慕い腰が重くなり・ひざの力をなくし・小便が近くなると云われる。<sup>(1)</sup>

此の三戸の虫は庚申の日に天に上り人間の罪を天帝に告げる。そこで庚申の夜は三戸の虫が天に上れないように眠らないで監視するのである。そして庚申の夜三戸の名を唱えることによつて三戸の虫が体の中から去つて幸が訪れて来るといふのが此の信仰の概要である。

### 三、大野郡に於ける庚申信仰の歴史

此の庚申信仰は吾が國に於いては、八世紀末か九世紀初頭に始められたと云われている。そして鎌倉―江戸の各時代を通じて一般に浸透して行つた。此れ等を推定し証拠付けるものにはまとまつた文献は僅かしかなく、断片的に拾い上げなければならぬわけであるが、地方の状況を知り得るものは各所に建てられてゐる庚申塔と若干の古記録である。

以上の史料を分類して見ると次のように考えられる。

才一期 天正から慶長迄

才二期 慶安頃から寛文頃迄

才三期 元禄より寛政頃迄

才四期 文化・文政より幕末迄

(才一期) 先ず才一期の庚申信仰から順を追つて説明しよう。大野郡に庚申信仰が始められた事が確實に分かるものは朝地町平井観音堂にある庚申塔が建立されていることからである。此の庚申塔によると天正六年(一五七八)「弥勒寺瑞松寺同納所梵策藏主□喜藏主光淳慶□源孝次平宗□夫婦平実継夫婦因神実長□厚孝貞三宮□三郎夫婦柿木又右衛門夫婦山崎内清三同所徳房小太郎助十郎妙泉禅定尼大ユ山崎三郎兵衛尉本願栄藏」(以下缺損)<sup>(3)</sup>等多数による信仰グループが存在していたことが分かる。このグループで珍らしい事は後世

の庚申待には一人一戸宛加わる事が大体規定になつてゐるが此の時代には夫婦共々信仰グループを形成してゐたものと思われる。

又、才一期の庚申塔には非常に長い趣旨を付してゐるようであるが、前記平井観音堂庚申塔の趣旨は有兄という僧侶が筆を取つてゐる。此の有兄は現在朝地町真言宗大恩寺系譜によると天正の兵火にかゝつて僧坊が焼けた時、寺の復興に盡力した僧で此の寺では中興の英主とあがめてゐる。このような事から此の時代の庚申信仰のグループは密教系の僧侶によつて指導されてゐたのではあるまいか。

慶長八年(一六〇三)千歳村大字前田字原田小字福生寺に次のような庚申塔が立てられた。「大日本国鎮西豊後国井田郷原田名内信心檀那辛酉相藤原朝臣広瀬九郎兵衛尉家継身宮□□武運長久子孫繁榮而過去罪消滅現世得無比箇当來為得仏果願也」<sup>(4)</sup>と家継が武運長久・子孫繁榮を祈つた。この信仰対象は、「梵天帝釈四大天王五大明王三世諸仏」であり後世のように青面金剛や猿田彦ではないことが注意すべき事であらうかと思ふ。

以上のように才一期の庚申信仰はその地方の勢力のある者か又はそうした信仰に深く結びつけられた極く一部の人に限定された信仰であつたように考えられる。

(才二期) 大野郡内に於ける慶長迄の庚申信仰は前述し

たように極く少数の塔による外は知るすべをもたない。それでは才二期の庚申信仰はどのように行われたかを次に述べて見たい。大野郡の此の信仰の才二期は慶安の頃より始まつて来る。

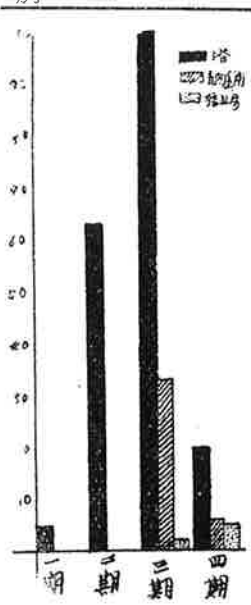
三重町鬼塚歳神にある慶安元年（一六四八）の庚申塔は珍しいものであるから紹介して置きたい。高さ一米十二櫃、巾四十二櫃で上部に円があり庚申神という字がその中央に刻まれその両側に雌鶏雄雞と割り書きをしている。庚申塔に何故鶏という字を刻んであるのかということについては種々議論があるが、三輪善之助氏は「青面金剛の使者が鶏であるので別に種々の理窟を並べる必要はない」といわれている。<sup>(5)</sup>

元禄二年刊の寂照堂谷響集に青面金剛が庚申の信仰対象とされると書かれているが実際に庚申塔にあらわれたのは多少さかのぼると考えても良いと思われるし、慶安の此の塔も青面金剛信仰のきざしと認めても差支えがないように思われるが、しかし庚申神という碑銘と青面金剛を直ちに結びつけて考えるのは具合がわるいではなからうか。

鶏は邪鬼を避けるという民間伝承があるようだが或はこうした民間に伝承されていた習俗が庚申と合致して来たと考えられないだろうか此の点御教示をいただければ幸いである。

庚申塔の建立年代のピークは寛文が最も早く挙げられ、才二期全体としては才一期に比して図表(1)の如く六三という指

庚申塔数の変化



数を示している。此の割合で庚申信仰が一般に浸透したものと考えられる。

才一期と才二期の初めの庚申塔はあつてい信仰心を表わした重厚な感があるが、寛文の頃になると塔も一・二を除いて形式化して非常に簡単なものになる。稀には犬飼町長谷にある戸上市郎右門等女子の加わらぬ一座が子孫盤栄所願満足を祈つて、三年の庚申に塔を建立するのだという趣旨を刻んだものなどは此の時期としては非常に珍らしいものである。<sup>(7)</sup>

又、朝地町志賀に志賀村長右門以下十四名の信仰団体が存在したという事は、寛文年間の庚申塔数と相まつて才二期を特色付けるものではないかと思う。

才一期に特定の人々が信仰したと思われる庚申信仰は才二期には入つて、後世いわれるような「作の神」の信仰としての地位を此の時期に確立し得たのではなからうかと考えている。

(才三期) 庚申信仰も才三期になると変化に富んで来る。庚申というのは干支の名称であるから礼拝の対象にはならない。そこで自分達が礼拝してもよいと思う対象を拵えて来る。この時期に二つの系統つまり仏教系統と神道系統とがそれぞれ信仰対象を具体的に設定して行く。先程から述べて居る青面金剛は仏教系統が置いた信仰対象である。

此の像は陀羅尼經集卷九によると一面四臂となつて居るが普通庚申石像又は画像には一面六臂・三面六臂と手の数が多くなつて居る。

よく庚申様は六手だから仕事が早い。仕事の早い者を庚申様のようだ(8)という伝承が見出されるし、それ故に農家が庚申様を祭るのだとして居る。

前述したように元禄年間に青面金剛が出て来るのであるが大野郡地方が青面金剛を信仰対象に持つたのは朝地町上尾塚の庚申塔元禄五年がその上限であるように思われる。そして図表(1)のように青面金剛の銘が塔に見えるので大体信じてもよいのではないかと思う。先程述べた伝承も大体元禄以後発生したのだと考へても間違いないものと思う。

庚申石像を見ると左手の一つに女性らしい人物の髪を掴んでぶら下げている。美浜地方ではこれを「しよけら」と呼び庚申様がしよけらをあばれ出さないようにしているのだといつて居るそうである。「庚申の御本地」(10)の中に「せいけら」

とこれに触れた歌があるのみで特別の伝承をもつていない。

朝地町下尾塚に於ける庚申碑群の中で青面金剛は元禄十年(一六九七)から嘉永三年(一八五〇)迄約一五〇年間引き続いて信仰されて来た。しかし現在此の部落では猿田彦の掛図を有して居り、若宮八幡社の神主を呼ぶといふので嘉永以後猿田彦の信仰に移つたものと思われる。

猿田彦を信仰対象とする事は才三期に始められるようである。干歳村・柴山八幡・三重・市辺田八幡・朝地・深山八幡の附近に行くと、一様に猿田彦の信仰が行われた形跡があり又現在行つて居る。

これ等の場所を調査して見ると、干歳村柴山八幡の天明三年が最も早く猿田彦信仰をしたということが塔によつて分かる。又深山八幡の近所は明暦丙申(明暦二年)から始められ寛文一宝永一安永一天明一寛政一文化と続いているが、寛政以前の塔には猿田彦の碑銘を見出すことが出来ない。此処では深山八幡社神主石川信濃守を中心として猿田彦信仰が行われた。

三重町市辺田八幡の附近にも現在猿田彦信仰を行つて居る座があるが、同所の庚申塔は寛文のものしかなく、これによると碑銘が猿田彦となつていないので、猿田彦信仰は室町末期迄さかのぼり得ないとする窪先生の説は正しいと思ふ。

しかし、猿田彦信仰は青面金剛と殆んど同時に始まつたと

いわれるのは、少し早いのではなからうか。猿田彦信仰は青面金剛信仰よりもほぼ一世紀位いおかれて発達したと大野郡地方では考えてもよいと思われる。

先程一寸触れた庚申の御本地という写本が延享四年に出来たことを注に記して置いたが、これによると青面金剛の信仰に触れて居り、講のもち方等詳しく書いてあるので恐らく才三期の三重地方の庚申信仰はこれによつて行われたものと考えられる。此の写本は「京童跡追方四庚申縁起」の項に非常に類似しているので或いはこれから取つたものではないかと考えている。

才三期の特長を取り出して見ると才二期で新しい民間信仰としての地位を確立した庚申信仰が勢力のある寺院や神社や信仰の深い指導者によつてその信仰を指導されて来るようになったと考えるのもよいと思われる。

(才四期) 大野郡の庚申信仰も文化・文政の頃になると才四期に入る。

大阪天王寺には庚申堂が建立されているが、大野郡地方にも庚申堂の建立が為されている。文化年間<sup>(11)</sup>かやぶきではあるが二間×二間の庚申堂が三重町肝煎に建立され木像の本尊が安置されている。後此の堂宇は九尺×二間に縮少されたようであるが、<sup>(12)</sup>いづれにしてもささやかに農村の片隅で行つた此の信仰が堂宇を建立し信仰のメツカをもつに至らしめた所に

才三—才四期の特長があるのではないかと思う。

又、前述した大恩寺門徒は大体同じ程度の生活地位を持つ人の間で講を作り、相互金融をしたという例が見出される。<sup>(13)</sup>

これによると年五分の利率で借付けその利子の一部をさいて寺に寄進している。資料がないために才一—才三期の間は分かつていない。しかし、作の神の信仰という意味が相互扶助的な意味をもつていたということが云えると思う。

庚申信仰の中で最も特長と思われるのは徹夜することである。ろ。

庚申の夜寝ずに庚申待をすることについて窪先生は「平安時代には実際に徹夜をしていたのかもしれないし、織豊時代でも徹夜をする人もあつたらしい」と<sup>(14)</sup>とされているが、此の徹夜の習慣が徐々に崩れ才四期には十八座の待明しをしたり、<sup>(15)</sup>三重町内山地方の文化二年十一月十一日暁より十二日朝迄、同七年十一月九日より十日迄と定期的に徹夜をしたようである。

現在では徹夜の例は一例も見出すことが出来ないが、戦前迄「一度夜家に帰えり翌朝集り直す」という三重町上鷺谷の例がある。これなどは徹夜の習慣の変化したものであろうと思われる。この徹夜についての伝承は「庚申様は後家の晩」と千歳村柴山地区でいわれているように禁欲的な意図がほの見えるわけであるが、これだけでは「道家の養生の本」とは

いきれないし三戸信仰の変容であるという理由にもならぬわけである。

才四期も江戸時代の終りになると此の信仰も下火になつて来るが、今迄述べた特長の外にもつと大たんな推測が許されるなら才二期・才三期に一般が感じていた身近さが薄くなり庚申信仰が一般から遊離して来るのではなからうかと考へる。

明治の風が吹き初めると科学的・合理的精神の発達に伴つて、或いは又娯楽機関の発達に伴つて非常に衰えて来る。現在では山間の部落によつてようやく命脈を保つてゐるに過ぎない状態である。

以上、私の研究の中間発表をさせていただいたが他の地方の此の信仰について御知らせを願えれば望外の喜びである。尚、此の研究をなすにあつて種々お力ぞえを賜つた伊東東先生、貴重な書籍を御恵与下さつた窪先生に厚く御礼を申し上げます。

(朝地町・大恩寺中学校教諭)

註 1. 窪徳忠先生中国の三戸信仰と日本の庚申信仰(東方学論集

才三輯所収三戸表

2. 前掲書三十頁

3. 伊東東先生編増訂大野郡金石年表

4. 3.に同じ。

5. 三輪善之助氏「庚申待と庚申塔」

庚申信仰の歴史

6. 和漢三才図絵庚申
7. 寛文五年
8. 朝地町西大野地区草深
9. 同右
10. 延享四年羽飛村本主伊藤藤八写 三重町 秋葉文庫所蔵
11. 銀札方御用掛後藤藤弥蘇治手控 秋葉文庫所蔵
12. 三重代官所寺社帳(嘉永二年) 秋葉文庫所蔵
13. 庚申帳 朝地町板井迫 佐藤作男氏所蔵
14. 前掲東方学論集 才三輯四十三頁
15. 13に同じ。

### 郷里大在祭りの思出

翁 早 子

北海道郡大在村は私の生れた懐かしい思い出の地です。私が小学校通学当時は未だ駅も無い淋しい村でしたが一年に二回催される氏神様のお祭の賑やかさ、又其の興味多い行事は都会の人に味いの出来ないものが有りました。日々を農時にいそしむ老若男女も当日は綺麗な服装に美の限りをつくし、やたいや、みこしのねり歩きに見とれて喜ぶ者、又恐しい赤じしに頭をかまれて得意そふな顔をして喜ぶ人、威儀を正して拍手打つ老人も必らず豊年を御祈りして居る事でしょう。夜になつて村の名入の提灯が花火の様な美しさでわつしよい、わつしよい早いぞ早いぞとねり歩く青年の勇ましさ、老人もついでにさわられてねじはち巻ではしやぐ。面白しさは又格別、お祭で無くては見られない風情です。遠い満洲に暮して居た時分も時折郷里の祭を思出して旅の心を慰めた事も幾度か有りました。(別府市在住)